輝くひと ①

だいちゃんと共に五十年

交通安全教室で伝える命の大切さ

茨城県交通安全教育講師
高須（たかす）しづ子（こ）さん

腹話術人形のだいちゃんを見たことがありますか？　交通安全教室の時に小学校に来てくれた、あのだいちゃんのことです。だいちゃんは今でも現役で、各施設を訪問しています。今回は、だいちゃんと長年一緒に交通安全教室の活動をされている講師の高須しづ子さんをご紹介します。

●結婚を機に退職して

高須さんは息栖で生まれ育ち、昭和五十年に鹿島警察署に入署。交通課に所属し、駐車違反などの取り締まりをしていました。

結婚を機に、七年勤めた警察署を退職し、専業主婦として子育てに忙しい日々を過ごしていました。ある時、警察官のご主人の上司から、「交通安全指導をやってくれないか」と連絡が入りました。子育て真っ最中で、ご主人は、当時つくば万博の仕事で忙しく、両立できるか悩みましたが、実家が神栖だったので「やりくりすれば何とかなる！」と決心しました。

●腹話術と交通安全教室の始まり

腹話術を取り入れた交通安全教室は全国的におこなわれていました。腹話術は子どもたちの興味を引き、楽しみながら交通ルールを学べるということで導入されたようです。高須さんも、自ら腹話術を習いに行き、検定を受けたそうです。

「腹話術は、口を開けずに人形が話しているかのように見せるのですが、どうしても口が動く言葉があります。例えばパピプペポ。唇を付けないと発音が難しいです。口を動かさないのが腹話術でしたが、この4・5年はコロナでマスクをするようになったので、口元を気にしないスタイルに慣れてしまいました（笑）」

●だいちゃん怖い？

小学校では大人気のだいちゃんですが、1・2歳の幼児にとっては、少し怖い存在。いきなりだいちゃんを見て、泣き出す子もいました。そのような経験を通して、幼児の前では「だいちゃんは木の人形だよ」と安心させることから始めます。

交通安全について伝えるときに大切なことは、子どもたちを飽きさせないこと。

「腹話術は台本通りにやっても伝わらないんですよね。テンポ良く掛け合うのがコツです」

そのために面白い内容を考えています。笑うことで記憶にも残ります。

●東日本大震災での被災

とても明るく活動的な高須さんですが、五十年の活動のなかで、ご自身のつらい体験もありました。それは平成二十三年の東日本大震災での被災です。建ててまだ数年のご自宅が傾き、精神的なショックを受けました。気持ちが落ち込み、だんだんと体調を崩してしまったそうです。

横断歩道を渡る練習。手を上げて、みんな上手に渡れました

仕事をする気にもなれずにいたところ、学校の先生をしている友達から「交通安全教室をやってほしい」と何度も声がかかり、また再開することができました。だいちゃんが高須さんの心の支えとなりました。

●形は変わっても…

最近は、腹話術をする人が減ってしまい、高須さんのあとを引き継ぐ方がいません。でも今、横断歩道の渡り方を子どもたちに教えるなど、高須さんをサポートしてくださる方がいるので、「伝え方は変わりますが、これからも続けていきたい」と前向きに話してくださいました。

「交通安全教室は、自分ひとりの力ではできません。交通安全協会や交通安全母の会、市役所などの協力があり、成り立っています。教室を開催する保育園などの近くに住む方々に参加してもらうことで、子どもたちの印象にも残ります。これからも、周りの皆さんと協力していきたいです」

●だいちゃんの魅力

だいちゃんのことを初めて知ったという方もいらっしゃると思います。私も昨年初めて拝見しました。夏休み前の市内小学校、低学年の交通安全教室でした。保育園・幼稚園の時に見たことを覚えている子は「もしかしてだいちゃん来てるの？」とワクワクした様子。高須さんがだいちゃんと一緒に登場すると、歓声が上がりました。前に見た時の内容まで覚えていたのには驚きました。だいちゃんが、これほど子どもたちの記憶に残ったのは、腹話術の魔法？「笑うことで記憶に残る」ことの証明でした。

だいちゃんは生きているの？ 子どもたちは興味深くみていました

高須さんが、だいちゃんと交通安全教室を始めて五十年。最初に出会った子どもたちの年齢は六十代前後。もしかしたら、お子さん、お孫さんと共通の話題になるかもしれません。半世紀に渡り子どもたちに寄り添い、楽しく交通ルールを教えてくださり、ありがとうございます。

これからもユーモアあふれる腹話術で、たくさんの人に交通安全の大切さをお伝えくださいますよう、お願いします。

子どもたちの笑い声。みんなだいちゃんに夢中でした

読者の声　私の学校にも高木さんが来て手話を教えてくれました。私も手話を勉強して耳が聞こえない人とコミュニケーションをとれるようになりたいです。

読者の声　小学生の頃に遊んでいた友達にろう者がいました。みんなで身振り手振りで意思の表現をして会話していたことが、手話だったと思い返しました。